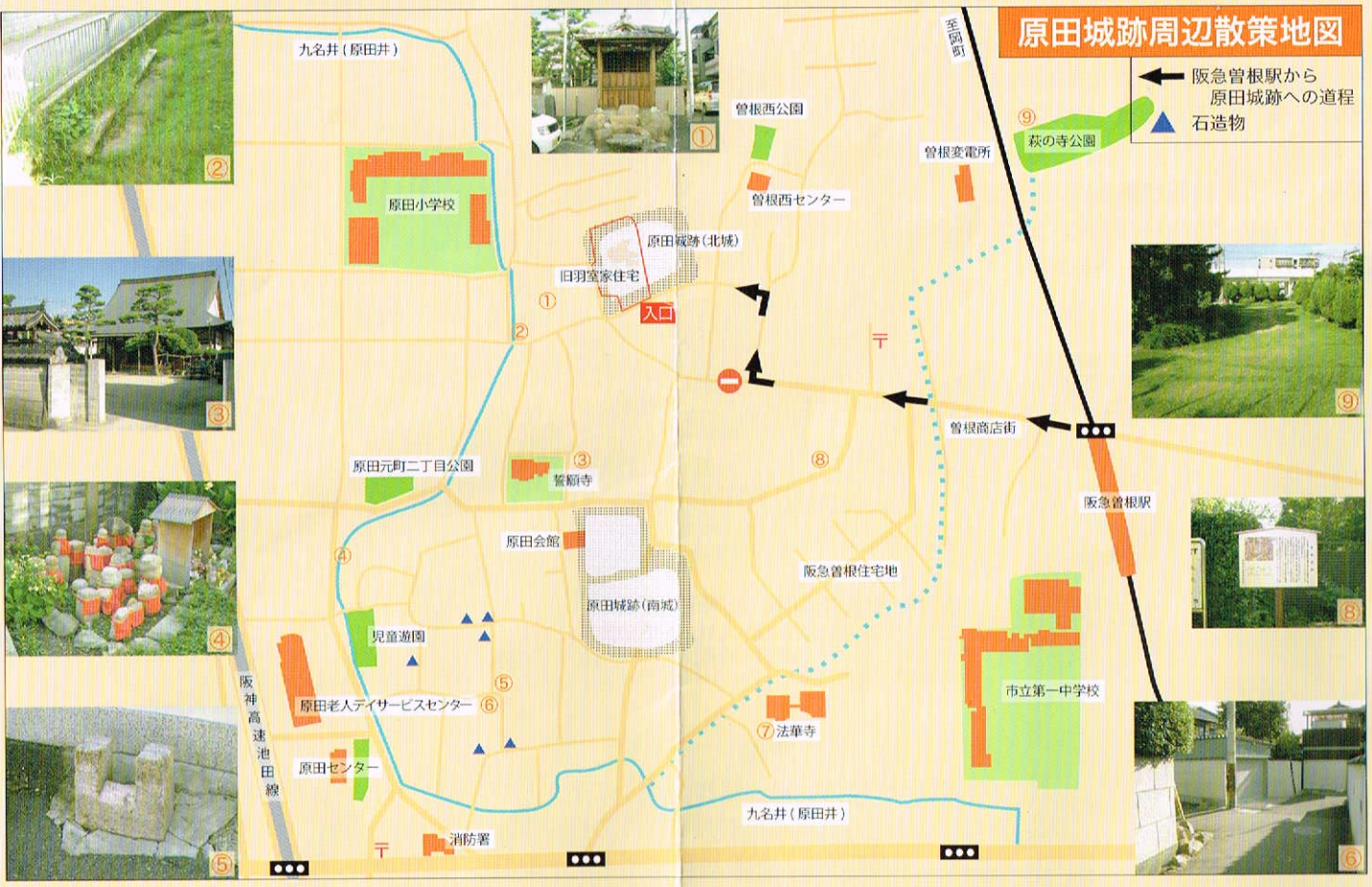


① 愛宕堂　将軍地蔵（愛宕神の本地仏）と伝える騎馬人物像をまつり、毎年8月の地蔵盆には北之町、中之町の講中が輪番で当屋を務めてお祭りをしている。

② 九名井（原田井）　酒井・森本・岩屋（伊丹市）、田能（尼崎市）、勝部・原田・桜塚・曽根・岡山（豊中市）の九ヶ村の田を潅漑するために開削された中世以来の基幹水路。

③ 誓願寺　浄土真宗大谷派。文亀元年（1501年）、本願寺實如の門弟となった当地住人の渡邊治朗左衛門が創建。原田村の中心寺院。

④ 五輪塔群　九名井（原田井）の脇に集められた石塔群で、歴史的景観の一部として貴重。多くは室町時代から江戸時代の一石五輪塔で、石仏も見られる。

⑤ 石造物　道のそこここには昔の農村生活を彷彿とさせる磨臼や唐臼の杵の柄の台などが置かれている。

⑥ あて曲げの道　集落内の道路の多くは、城下町などと同様、T字形に交わるところが多い。敵の攻撃からの防御を目的としたものとされる。

⑦ 法華寺　日蓮宗の寺院。もと熊野田村にあったが、寛永12年（1635年）に岩槻藩阿部氏の家臣によって当地に移転された。

⑧ 曽根遺跡　弥生時代～鎌倉時代の集落跡。弥生時代の竪穴住居のほか、10世紀の大型掘立柱建物跡が見つかっている。

⑨ 蛇喰池跡　萩の寺の南には、かつて蛇ハミ池と呼ばれる灌漑用の溜池があり、南西の谷筋には水路が掘られた。池は公園、水路の一部は遊歩道となっている。

※ 原田集落　原田城北城から南城付近に広がる古くからの集落。江戸時代には梨井、中倉、角、南町の4つの村に分かれ、忍藩阿部氏を中心に旗本船越氏・鈴木氏といった複数の領主が知行した。

■編集・発行　豊中市教育委員会　地域教育振興課
■印　　刷　株式会社　廣済堂

※当城跡・住宅は常時公開をしておりません。ご来場の際は、下記の問い合わせ先や豊中市ホームページ等でご確認ください。

問 地域教育振興課 文化財保護係　☎06－6858－2581

豊中市指定史跡

原田城跡

国登録有形文化財

旧羽室家住宅

現在から過去をたずねる

歴史の重層に想いをめぐらす

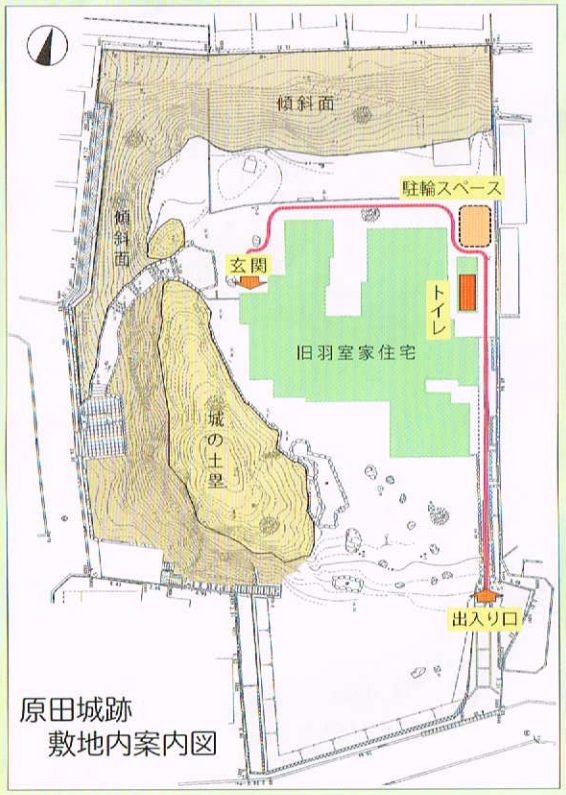
豊中市教育委員会
Toyonaka City Board of Education
管理・運営　とよなか・歴史と文化の会

原田城跡（はらだじょうあと）

はじめに

原田城跡（北城）は、昭和38年（1963年）、当時の豊中市文化財保護規則により市史跡に指定され、昭和62年（1987年）の豊中市文化財保護条例の施行にともなって、あらためて市史跡に指定された中世の城館です。

「城」というと、天守閣がそびえ立つ江戸時代の城郭、あるいは山そのものを要塞にする戦国時代の山城をイメージすることでしょう。しかし、原田城跡はそうした大規模な城郭ではなく、原田・曽根一帯を中心に活動した土豪原田氏の居城で、いわゆる「小規模城館」と呼ばれるものです。

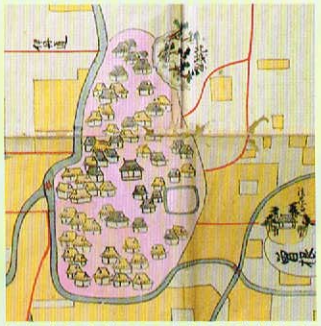


原田城跡
敷地内案内図

北城と南城

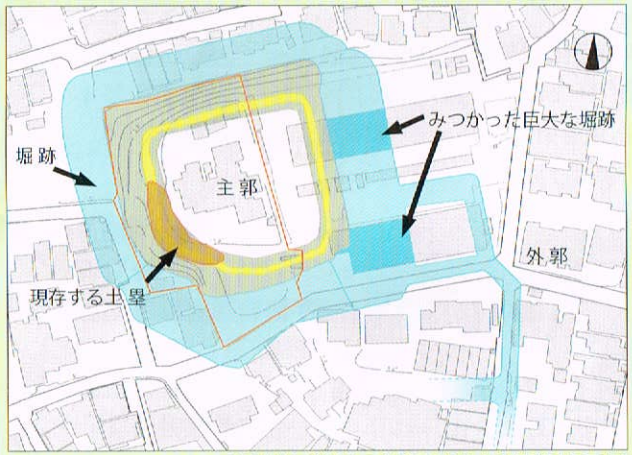
原田村には、北城と南城という二つの城がありました。江戸時代末期に作成された絵図（『文政七年原田村絵図』）を見ると、原田村の中に南城跡を示す四角形の堀跡が描かれています。南城は、発掘調査によって16世紀後半に内堀と外堀が掘削されたことが確認され、その範囲と位置が推定されています。

一方、北城については「北城跡」と記され、その一帯には松林が描かれています。北城についても発掘調査によって鎌倉時代に築かれたことがわかってきました。


『文政七年（1824年）原田村絵図』

北城の構造

北城は、豊中台地南西端の丘陵にあり、南西に広がる平野を一望できる絶好の位置に立地します。その丘陵の東側には、南北140m・東西120mの城域を示すように、「ヨ」字状の外堀が巡らされています。丘陵先端にある約50m四方の主郭部は、荒木村重の乱※が起きた16世紀後半に、幅15m・深さ５mもある内堀を巡らすなど、大規模な改修を行なって守りを固めています。

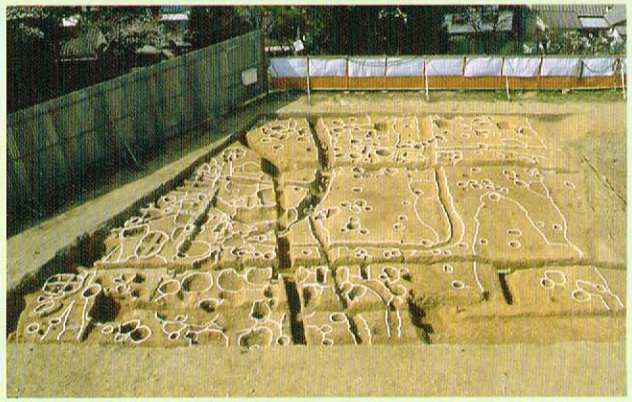


16世紀後半の原田城北城推定復元図

東側の敷地から見つかった巨大な堀

主郭部の内側には、現在でも高さ1.5～2.8m・幅５～10mの土塁が残っているほか、東側と南側にもその痕跡が確認されています。

主郭内部の発掘調査では、数多くの柱穴や礎石痕が確認されており、土豪の居宅にふさわしい家屋が建てられていた可能性があります。また、焼けた壁土や廃棄された土坑、３層にわたる焼土層があることから、数回の火災があったと考えられます。

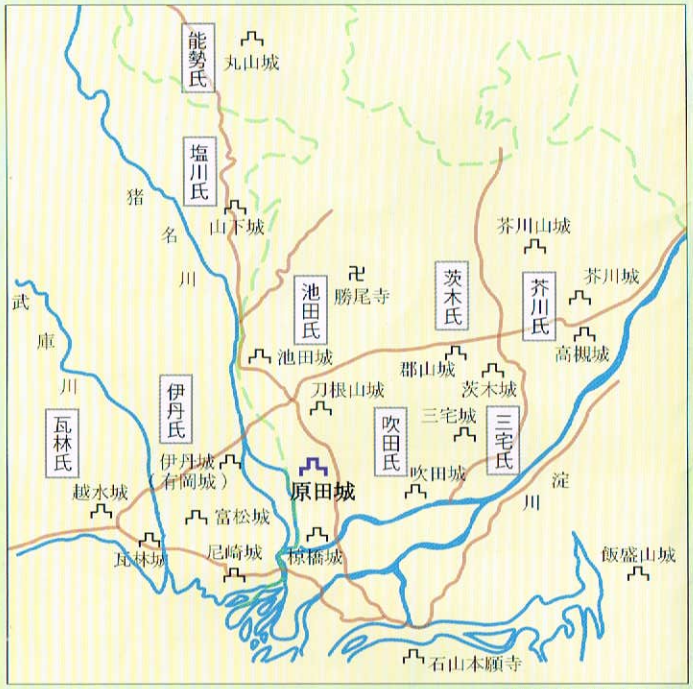

東側の敷地から見つかったたくさんの遺構

※荒木村重の乱　織田信長の家臣で摂津守に任じられていた荒木村重が、天正６年（1578年）に有岡城（伊丹市）で反乱を起こし、翌年に鎮圧された事件。このとき、原田城の他に池田城（池田市）などが、織田軍の陣地として利用された（『信長公記』）。

北城の築城と原田氏

原田氏は、弘安元年（1279年）に能勢一帯に君臨した多田院御家人の一員として、はじめて記録（『多田神社文書』）に登場します。一方、北城は13世紀後半～14世紀初頭のうちに築かれたことが、発掘調査で出土した遺物から推定されています。

康永３年（1344年）に、原田氏は大炊寮の所領である六車御稲の年貢を横取りするなど、徐々にその力を蓄えていきます。15世紀中頃には原田一帯を支配する土豪に成長するとともに、室町幕府の管領（将軍の補佐役）で、摂津守護である細川氏の家臣団に組み込まれ、戦乱の世に巻き込まれていくことになります。



摂津の城と国人

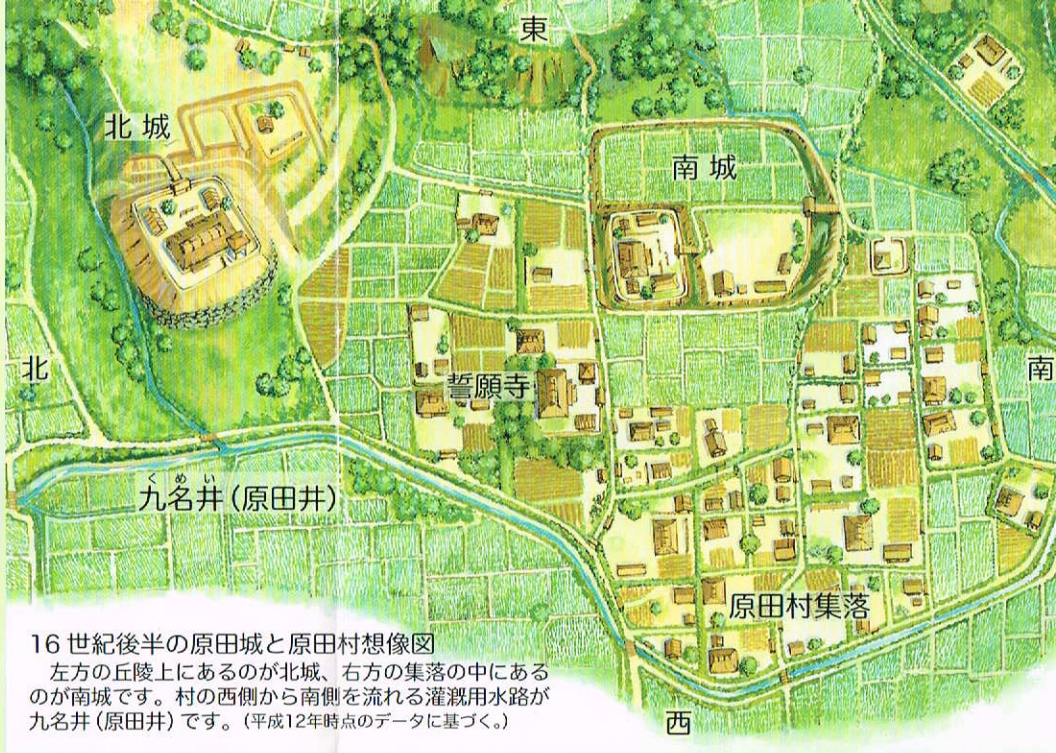
↑原田右衛門尉墓塔
（日本民家集落博物館内）
天文16年（1547年）２月３日の銘がある。

北城の廃城とその後の原田氏

天文16年（1547年）、細川氏の内紛で細川氏綱側についた原田氏は細川晴元の大軍に攻められ、北城は落城しました。これにより北城は廃城し、荒廃していったことが推測されます。16世紀後半には南城の堀が掘削されていることから、これ以降、原田氏は南城を中心に活動していたとみられます。

また、荒木村重の乱では、織田信長方の古田織部と中川清秀が北城に陣を構えたようです。平成６年（1994年）に行われた発掘調査からは、16世紀後半に大改修が行われ、一時的に城として使われたことが明らかとなっています。

慶長年間（1596～1615年）には、北城・南城とも廃城し、原田氏の多くは豊後直入（大分県竹田市）などへ移り、現地には土塁や堀跡、伝承だけが残されました。



16世紀後半の原田城と原田村想像図
左方の丘陵上にあるのが北城、右方の集落の中にあるのが南城です。村の西側から南側を流れる灌漑用水路が九名井（原田井）です。（平成12年時点のデータに基づく。）

原田城跡のもつ意義

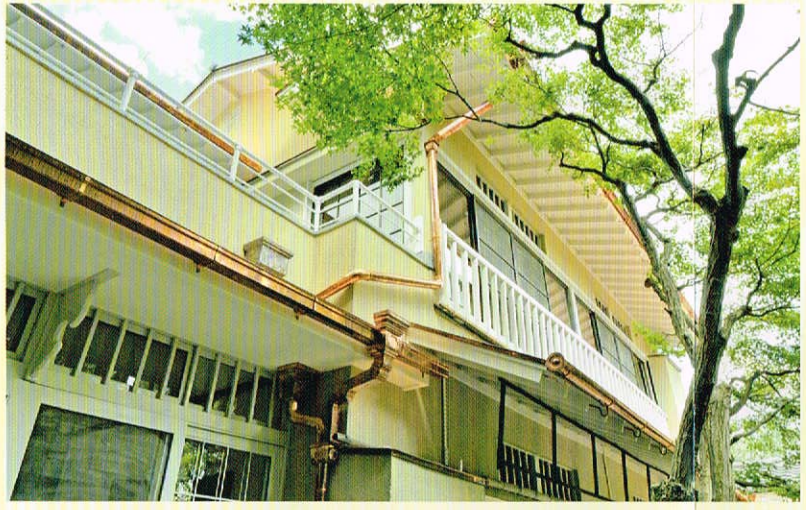
戦国時代には、織田信長のように華々しい活躍が伝えられる武将が多くいます。それら戦国武将の活躍を支えた人々の中には、中世の村を基盤に活動する土豪たちがいました。原田氏も、戦乱の世に生きた土豪の一人でした。

このような土豪たちは記録の中に数多く見出され、豊中市内では芝原（柴原）・熊田（熊野田）・利倉など、村の名を冠した土豪が知られています。かれらが活動の拠点とした城館で、堀の配置が復元できる事例は、大阪府内では原田城跡以外にはあまりなく、さらに城主である土豪とともに城館の変遷がわかるものは、今のところ他に見られないことから、原田城跡は非常に貴重な史跡であると言えます。

←土塁上から見た伊丹方面（明治時代）

原田小学校付近から
原田城（北城）を見る（明治時代）→

旧羽室家住宅（きゅうはむろけじゅうたく）



国登録有形文化財　旧羽室家住宅（平成19年12月５日登録）

昭和12年（1937年）、当時住友化学工業株式会社の役員の一人であった羽室廣一氏が、個人の住まいとして建てた木造二階建ての住宅です。約2,950㎡の敷地は原田城跡（北城）の主郭の一部に相当し、戦国時代末期（16世紀末）に廃城して以後は、長らく近世梨井村庄屋・野口氏の所有となっていました。明治43年（1910年）、箕面有馬電気軌道（現阪急宝塚線）の開通以来、池田室町・岡町・豊中と軌道沿線に相次いで郊外住宅地が開かれるなか、城跡付近もまた昭和10年（1935年）頃に松籟園住宅地として開発・分譲され、その一角を羽室氏が購入されたものです。

和洋折衷の外観を示す住宅建築

旧羽室家住宅は、延べ面積約460㎡を有する木造二階建て・桟瓦葺の主屋（離れを含む）、二階建ての土蔵、平屋建ての納屋の３件の建物からなります。

主屋は和と洋の特徴を備えた和洋折衷式の建築で、とくに外観は、瓦屋根と数寄屋風の離れに和風の特徴を認めますが、モルタル塗大壁造りの外壁や、一階サンルーム、二階窓外の木製手摺などに洋風の特徴がうかがわれます。

数寄屋の工夫が見られる
一階続き座敷

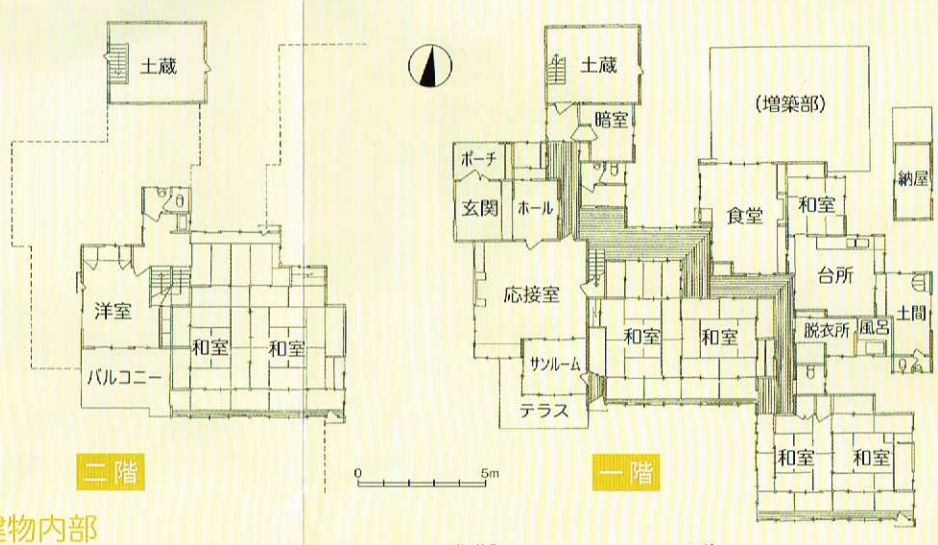
鋸目の化粧梁や矢筈貼りの床が
特徴的な応接室

暖炉・食器棚などに
昭和モダンを感じさせる食堂

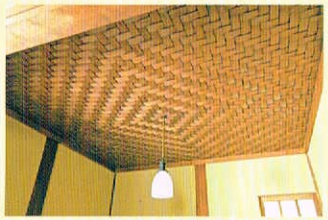
棚・床・書院が備えられた
数寄屋風の二階

サンルーム前にて（昭和13年頃）

応接室にて（昭和13年頃）



シンプルな手すりと
明かり取り窓が特徴的な階段室



精巧でデザイン性豊かな
階段室の網代天井

水平ラインを強調した
アール・デコ風の応接室の暖炉

食堂に設けられた
建築当初からと見られるガス燈

昭和モダンの雰囲気が漂う建物内部

和洋の要素が溶け合う外観に対して、建物の内部はあくまでも和風を基調とし、その中に洋室をうまく取り入れています。間取りは、正面玄関から応接室、続き座敷、離れを雁行形に配置し、廊下をはさんで食堂、台所を設けるなど、伝統的な和風建築の流れをくむ部屋の配置といえます。また、離れには茶室としても使える数寄屋風の和室を設け、階段室の網代天井、建築材に栂材を多用するなど、質素な中にも凝った意匠を随所に見ることができます。一方、一階には暖炉のついた応接室やガス燈を備えた食堂を配し、二階にもバルコニーに面した洋室を設けるなど、外観とともに当時の住宅洋風化の流れがよく示され、昭和初期のモダンな雰囲気を今に伝えています。